（3）記録の取り方

事実の記録は客観的に！

話を聴きながら、客観的に事実関係を記録していきます。子供同士のトラブル等では、その後、子供本人（当事者）から聴き取り、周囲の関係する子供からも確認することが重要です。

事実確認があいまいだと、相手やこちらの主観が混じってしまい、その後の対応を誤る恐れがあります。

（記入の例）
×保護者が怒りのあまり、ものすごい力で校長に向けて椅子を投げつけた。
○保護者が肩の高さまで椅子を持ち上げて投げ下ろしたため、校長の足に当たった。椅子の足の一本が曲がった。

このような場合は、申し入れしてきたこととは別に、「犯罪になる可能性がある。」と説明をすることも必要です。

コラム

子供からの聴き取りの留意点

子供同士のトラブルをきっかけとして、学校が双方の保護者の間に挟まれてなかなか解決できずに苦労する場合があります。子供同士の人間関係は回復できる状況があるのに、保護者と学校とで子供不在のやりとりが続いていることも多々あります。

たとえば、「けがをさせられた」「いじめがあった」などという訴えに対して、最初の事実確認を丁寧に行わないと、被害を訴えている保護者からも、加害者とされた側の保護者からも、納得がいかないということにつながります。

子供同士のトラブルについては、最初の聴き取りが重要になります。それは、日を変えて繰り返し同じことについてたずねると、周囲からの情報が入り混じり、暗示性や誘導などネガティブな問題が発生し、子供に情報の混濁が起こり、何が真実なのか確認しようがなくなることがあるからです。

そのため、後から確認することは不可能であると考えましょう。子供からの聴き取りは、原則として初回の一回で終わらせ、記録を残すことが重要です。

特に複数の子供が関係している場合は、教員が分担して聴くこともありますが、「どの順番で、どの子供に、誰が、どこで、何を、どのように聴くのか、確認しておかなければならないことは何か」といったことを確認した上で行うことを心がけましょう。